

【 研究ノート 】

日本の国費留学生の異文化的適応  
九州大学における複数の事例調査

井上奈良彦  
(九州大学)

アナ・クリスティナ・メリノ

Intercultural Academic Adjustment  
of Japanese Government Scholarship Students:  
A Multiple Case Study at Kyushu University

INOUE Narahiko  
(Kyushu University)

Ana Cristina MERINO

**Abstract.** What factors contribute to a positive intercultural academic experience for foreign students in Japan? Using multiple case study research techniques, this study aims to examine qualitatively how and why three factors (Japanese language competence, interaction with other students, and perceived cultural distance) influence foreign students' experiences in a Japanese campus. Drawing from the results of previous research on foreign students, and particularly on foreign students in Japan, it seeks to explore the validity of the following propositions: (1) Foreign students' level of Japanese will not necessarily influence their feelings of well-being on campus; (2) Foreign students' on-campus social interactions with other foreign students will be more frequent and preferred over interactions with Japanese students; (3) The greater the perceived distance between a student's home university culture and that of the host country, the less adjusted students will be. The experiences of 16 Japanese Government scholarship recipients enrolled at a large national university were recorded and examined. This study contributes to theories of cultural adjustment and intercultural communication by providing evidence for the acceptance or rejection of findings from previous research in a field that is heavily dependent on quantitative research techniques.

## 0 . はじめに

1983年に日本政府が「学生受け入れ10万人計画」を策定した当時、日本の留学生数は1万人を越える程度であったが、2003年にはじめて10万人を超えた。つまり、20年ほどの間に約10倍に増加したことになる。2005年度には12万人を超え、2006年度は若干減少したものの、117,927人であった（日本学生支援機構、2006）。その内、国費留学生制度により来日した外国人留学生はここ数年、毎年1万人弱で推移し、その累計は2003年の時点で約10万人に達した（日本学生支援機構、2006）。図1を見ると、国費、私費を問わず、日本の高等教育機関に入学する留学生の数が年々増加してきたことがよくわかる。このように量的には大幅に拡大した日本の留学生受け入れであるが、それに伴う就学上、生活上の支援が十分に行われてきたとは言い難い。

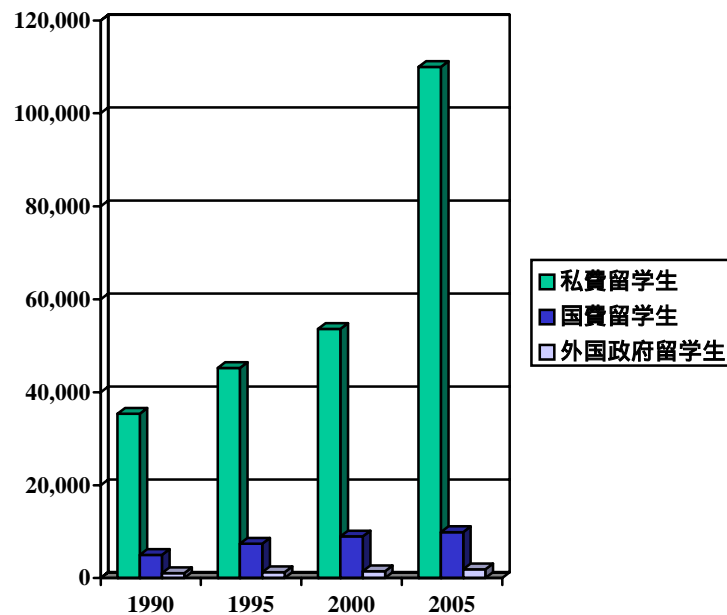


図1：留学生数の推移

(日本学生支援機構、2006に基づき作成)

Tanaka, Takai, Kohyama, & Fujihara (1994) は、日本の大学は国際化推進のためなら、留学生の住居、奨学金、日本語教育、カウンセリングなどを適切に用意できなくても留学生を積極的に受け入れ続け、その結果、日本で留学を経験した留学生が日本の大学に失望し帰国する、という問題を指摘している (p. 56)。

このような背景の下、本調査の目的は、日本の文部科学省の「国費留学生制度」によって日本に滞在している研究留学生（大学院生）の大学における経験に、「日本語能力」「学生同士の付き合い」「文化的距離感」がどのように影響を及ぼしているかを検討することである。留学生の問題は多岐にわたるので、本調査では国費留学生を対象とすることで経済的問題を除外し、留学の目的を限定するために研究留学生（大学院生）を対象とする。

留学生の教育で今後求められるのは、単に受け入れ留学生の数を増やすことだけではない。日本での留学経験の質をいかに高めていくかが今後最も重要な課題になるとと思われる。日本の大学

における留学生の経験を理解することは、日本政府や教育機関にとっても日本人の学生にとっても重要なことであると考えられる。さらに、将来日本への留学を希望している外国人にとって既に日本にいる留学生が経験したこと、苦労したこと、そして成功したことについて理解することは大切であると考えられる。

留学生に関する先行研究、とりわけ日本における研究を概観した結果、「日本語能力」「学生同士の付き合い」「文化的距離感」の3つの要因が頻繁に取り上げられることがわかった (Becker, 1990; Church 1982; Murphy-Shigematsu, 1997, 2002a, 2002b; Nishida, 1985; Sudweeks, Gudykunst, Ting-Toomey, & Nishida, 1990; Takai 1989; Tanaka, Takai, Kohyama, & Fujihara, 1994; Tanaka, Takai, Kohyama, Fujihara, & Minami, 1997; Ward 2001; 岩男、萩原、1977a、1977b、1978、1979、1987; 萩原、岩男、1987、1988; 上原、1988; 坪井、1991; 横田、田中、1992; 九州大学留学生教育研究環境調査委員会、2003; 具体的な先行研究の概観・批評は Merino, 2005 参照)。本調査では、その3つの要因について次の3点の命題を中心に考察していくことにした。

命題 1: 留学生の日本語の上達は、必ずしも学内における満足感を高めるとは限らない。

命題 2: 留学生は、日本人学生との付き合いよりも、留学生同士の付き合いの方が、より頻繁であり、より好む傾向にある。

命題 3: 留学生が自国の大学文化と日本の大学文化との間に認識する距離が大きいほど、異文化適応は低い。

## 1. 研究方法

現在まで行われてきた在日留学生に関する研究の中では、質問紙調査に対する回答の分析結果を報告したものが多く、共通の質問項目に対する大量の回答を数量的に処理することは、留学生の全体的傾向や属性別の違いなどを描き出すうえで有効な手段となるが、そこから個々の留学生の経緯、大学での経験や生活などを分析する調査の数は少ない。そこで本調査は複数事例研究 (Yin, 1994) として、九州大学に在籍している国費留学生の中から16名にインタビューをし、彼ら自身の日本留学での経験に「日本語能力」「学生同士の付き合い」「文化的距離感」がどのように影響を及ぼすかについて調べることにした。留学生の日本の大学での経験を具体的な事例として検討する。

### 1.1. 調査対象者

本調査の参加者はすべて九州大学に在籍する国費研究留学生である。研究留学生 (大学院レベル) は国費留学生制度による留学生受け入れの約8割を占める。渡日後6ヶ月間の日本語教育を受講後、大学院研究科において専門教育を受ける。留学期間は原則として2年以内だが、学位取得のため希望があれば所定の審査を経た上で、留学期間を延長することが可能である (Association of International Education, Japan, 2001)。

私費留学生と国費留学生の間には経済的な面で大きい格差が見られる。私費留学生の留学経験においてはアルバイトなど大学外からの要素の影響が大きいのに対して、国費留学生の場合は奨学金があるため、勉学以外の負担はそれほど多くない。本調査は、国費留学生に特有の問題や

経験に焦点を当てて在日留学生の大学での経験を明らかにすることを目的とするものである。

具体的な調査参加者の概要を表 1 に示す。

表 1：調査参加者の概要

番号	記号 (性別/年齢)	出身国	入学時期	専攻の文理・課程
1	B (M/27)	スロバキア	2001 年 4 月	文系・博士
2	B (M/29)	イギリス	2001 年 4 月	文系・修士
3	S (F/26)	シリア	2002 年 4 月	理系・研究生
4	S (M/33)	メキシコ	2002 年 4 月	理系・修士
5	J (F/27)	ハンガリー	2002 年 10 月	理系・研究生
6	C (M/27)	チリ	2003 年 10 月	理系・研究生
7	CH (F/36)	韓国	1998 年 4 月	理系・博士
8	SH (F/24)	台湾*	2001 年 4 月	文系・修士
9	N (F/32)	エジプト	2001 年 4 月	理系・博士
10	M (M/30)	フィリピン	2001 年 4 月	理系・博士
11	K (F/25)	ブラジル	2001 年 10 月	理系・修士
12	D (M/32)	フィリピン	1998 年 4 月	理系・博士
13	A (M/30)	パナマ	2001 年 10 月	理系・修士
14	A (F/32)	ブラジル	1998 年 4 月	理系・博士
15	O (M/28)	ノルウェー	2001 年 10 月	文系・修士
16	M (M/34)	イラン	2001 年 4 月	理系・博士

\* 国費留学生とほぼ同条件の「交流協会奨学金」を受給。

## 1.2. データ収集方法

南風原、市川、下山 (2001) は、面接調査について以下のように述べている。「データ収集の手段として、面接は、面接相手を理解しようという明確な意図のもとに行われる相互交渉である。たとえば、相手が何を考え、どんな気持ちでいるのか、自分の過去をどのようにとらえ、これから先、どう生きていこうとしているのか、といった人間の内的経験や思い、気持ちを引き出すために行われる」(pp. 30-31)。

本調査では、大まかなインタビューの方針を設定して行う半構造化インタビュー (semi-structured interviews) により、参加者に「日本語能力」「学生同士の付き合い」「文化的距離感」に関する質問を行った。インタビューでは、これらの項目に関する留学生自身の経験を自由に回答してもらい、そこからさらに関連する質問を行った。インタビューは 2003 年後半から 2004 年前半にかけて、自身も国費研究留学生である著者の一人 (A.C. メリノ) が、相手の希望に応じて日本語、英語、スペイン語を用いて、大学内の喫茶室や研究室で行った。インタビューでの会話は、参加者の理解を得た上でテープレコーダーに録音し、文字化した。面接時間は平

均して 45 分程度であった。

## 2 . 結果と考察

インタビューで得られた回答内容は参加者ごとにインタビューで語られた経験や意見を記述し、その中から参加者に共通して頻出する話題を項目化した。さらに事例横断的な分析を行い、話題項目毎に各参加者がどのような発言をしたかに注目した。本稿では回答の多かった項目を表 2 に列挙する。(本稿の基となった Merino (2005) においては、その第 3 章でインタビューの発言に語らせる形式で留学生の経験を提示している。)

表 2 : インタビュー回答における頻出項目

項目	参加者番号															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
<b>日本語能力について</b>																
<b>日本語研修コースへの不満</b>																
コースの構成		x	x			x										
ペース・開講時期が不適切	x	x		x					x				x			
能力別クラスの不適切		x		x		x					x		x			
教科書への不満	x	x			x											
<b>日本語学習を継続しない理由</b>																
研究では英語を用いる	x	x		x					x						x	x
研究のため日本語学習時間が不足									x				x			
帰国語日本語を使用しない										x						
<b>授業中の問題</b>																
日本語で行われる授業			x		x						x	x	x	x		
英語で行われる授業	x	x														x
<b>学生同士の付き合い</b>																
言葉の障壁により友人ができない				x		x			x	x						x
研究室について				x			x	x			x	x				x
飲み会		x				x			x		x		x			x
日本人の友人の大切さ			x				x				x			x		
留学生同士の付き合い	x		x		x				x		x		x	x		
日本人からの孤立 (英語プログラム)	x	x														x
<b>文化的距離感</b>																
教員と学生の関係についての考え方	x	x		x	x		x		x							x
欧米系と中国・韓国系の留学生の相違			x	x	x		x	x	x		x	x	x	x		
授業に対する満足・不満	x	x								x	x					x

(x は参加者がインタビューで言及した項目)

## 2.1. 命題の評価 日本語能力

命題1: 留学生の日本語の上達は、必ずしも学内における満足感を高めるとは限らない。

岩男と萩原が十年以上かけて行った研究(岩男、萩原、1977a ほか)は、日本における留学生に関する研究分野で広く引用されている。この中で何度も確認された研究成果の1つをもとにして命題1を設定した。留学生の日本語能力が向上すると日本人の発言の微妙な意味合いが理解できることによって、日本人に対する否定的な評価につながると言う。それに伴って自分たち留学生と日本人との社会的関係に対する満足感が低くなるという。しかし、今回インタビューから得られた結果はこの命題とは一致しなかった。インタビューを受けた留学生によると、大学において日本語能力は必要であり、満足感(feelings of well-being)(Cox, 1988; Heikinheimo & Shute, 1986; Marion, 1986)に影響するものである。たとえば、日本に六年間滞在している留学生(CH、F/36、韓国; A、F/32、ブラジル; D、M/32、フィリピン)は、大学での成功のためだけではなく日本語の習得にとっても、日本人学生と築いた関係は貴重で必要なものであると考えていた。

CH(F/36、韓国)から出されたような、日本で滞在期間が長くなればなるほど増す日本人に対する留学生の「責任感」などの感情や、萩原・岩男(1987)が予測した、留学生が日本人との社会的関係を深めれば深めるほど、コミュニケーション上の問題や意識の差、価値観の違いなどに直面する理由については、Brislin(1981)の研究結果から説明を行うことができる。Brislinは、受け入れ国における滞在期間の長さに加え、その文化の人々が海外の訪問者に対してどのような意識を持つかが、その国の人々が留学生に対して期待することに影響を及ぼすと言う。このことから、日本人の態度が留学初期の好意的なものから後に否定的なものへ変化すると留学生が感じたことは説明可能である。訪問者が外国を訪れた当初はその国の規範や慣習に従って行動することをさほど期待されないが、時間が経つにつれて受け入れ側は訪問者が文化的に適切な行動をとることを期待するとBrislinは述べている。

Takai(1989)もまた、日本人は新参者に日本文化を教えるという満足感を得ることができるため、日本文化についての知識があまりないように見える人々に対してより友好的に接するようだとしている。つまり、留学生は、特に日本語が流暢に話せるレベルに到達した時、教師や他の学生から日本社会に適応するよう期待される。他にも、留学生の受け入れ国に対する態度が到着時の友好的なものから、ある期間滞在した後は徐々に友好的ではなくなっていくといった態度変化が確認されている(Klineberg & Hull, 1979)。

留学生の数が増加したことによって、その国で外国人に対する社会的な見方が変化すれば、留学生増の好ましい結果の1つとして考えられるかもしれない(Ward, 2001)。本調査の結果が、岩男と萩原による研究の結果と一致しないのは、日本社会の変化を反映しているのかもしれない。つまり、彼らの研究が行われた20年前と比較すると、日本政府の高等教育国際化の成果として、日本人の異文化間の相違に対する感性が向上し、留学生に対する偏見も減ったという可能性もあるだろう。

今回の半構造化インタビューを通して得られたデータから見ると、本調査のすべての参加者が命題1に異議を唱えたことになる。日本語能力は日本政府奨学金プログラムに申請する際には必要条件ではないため(Tanaka, Takai, Kohyama, & Fujihara, 1994)、多くの奨学生の来日時の日本語能力のレベルは非常に低い。Murphy-Shigematsu(2002a)は、しばしば留学生は大学入学

前の日本語能力の必要性について誤解を招くメッセージを受け取り、来日後、日本語能力が明らかに必要な場面に直面するということが深刻なストレスの原因となっていると述べている。

本調査のインタビュー結果によると、来日後すぐに大部分の奨学生が受講する6ヶ月間の日本語の集中訓練の後でも、彼らの言語能力は初歩的なままであることが明らかになった。彼らは「言語的ハンディキャップ」(Crystal, 1987)があるにもかかわらず、多くの留学生は日本人学生と共に授業に出席することが期待され、大学レベルの日本語が使われる授業では何も得ることができないため時間を無駄にしているように感じたとして述べている。これは特に日本語だけで授業が行われる大学院に在籍する学生に当てはまる。しかしながら、英語で書かれたテキストを使うことができるため日本語能力は研究には必要ではないとみなしていた学生でさえ、日本語でのコミュニケーション能力は、他の学生や時に教授とより良い関係を築くために必要な手段であると答えている。英語で授業が行われる特別プログラムに入学した学生でさえも、日本人教授とよりよいコミュニケーションをとるためや日本社会に適応するために、日本語をもっと流暢に話したいと望んでいる。

今回の結果は、言語能力と留学生の満足感の間に関係があるとするほうの先行研究と一致するものである。そういった先行研究において、言語能力は、受入国における人間関係に対する満足感と関係があり (Blood & Nicholson, 1962; Deutsch, 1970; Gullahorn & Gullahorn, 1966; Morris, 1960; Sewell & Davidsen, 1961) また、一般的な満足感や社会適応とも関係がある (Deutsch & Won, 1963; Gullahorn & Gullahorn, 1966; Morris, 1960; Sewell & Davidsen, 1961) とされてきた。

インタビュー参加者によると、授業が日本語で行われているプログラムであろうと留学生のための特別なプログラムであろうと、学生はこのような日本語の問題を来日前に予期していなかったことがわかった。彼らに将来日本へ留学を希望の学生に対するアドバイスを求めたところ、すべての参加者が、日本に来る前に日本語のスキルを習得することを挙げた。留学情報やカウンセリングにおいて、この点について注意を払うことが望まれる。

## 2.2. 命題の評価 学生同士の付き合い

命題 2: 留学生は、日本人学生との付き合いよりも、留学生同士の付き合いの方が、より頻繁であり、より好む傾向にある。

Tanaka et al. (1997) や Hicks & Arima (Tanaka et al., 1994 に引用) らの研究から、日本にいる留学生は日本人学生よりも他の留学生とより頻繁に付き合うという命題 2 を設定した。本調査では、Bochner, McLeod, & Lin (1977) が予測したように、社会的な付き合いの背後にある動機が大学における友情関係の選択の決定に大きな影響を与えているという結果を得た。

本調査で示された結果を集約すると、日本人との交流に関してその質が一般的に低いと留学生は考えていて、彼らはより多くの交流を望み、さらに日本人学生との交流は一般的に留学生にとって就学上の利益と関係しているということになる。本調査でインタビューを行った多くの学生は(留学生のための特別コースに入学した学生を除いて)、日本人学生との付き合いは大学での成功と社会への適応にとって必要条件であると考えている一方で、一部の留学生は文化差が日本人学生や時に教授との効果的かつ友好的なコミュニケーションの障害になっていて、その結果、学

業や研究で成果をあげる能力に影響を与えていると考えていた。

日本人との付き合いを妨げる主な文化的障害は、研究室の飲み会に参加することが嫌いであったり、友情の定義や基準が異なっていることである。Sudweeks, Gudykunst, Ting-Toomey, & Nishida (1990) による、留学生の友好関係において文化的相違が与える影響を調べた研究でも、類似した結論が示されている。

しかしながら、文化的障害の存在や、それが留学生の異文化間の関係の親密さのレベルに与える影響にもかかわらず、言語は日本人学生との交流における成功を決定する主要な要因であると考えられていた。本調査のインタビュー参加者はすべて、自分の日本語能力が向上すれば日本人のクラスメートとの関係の質は向上すると答えていた。Becker (1990) も述べているように、留学生が日本人を中心とするネットワークに十分に参加するのを妨げる最大の障害は言語の問題ということになるだろう。

インタビュー参加者がさらに説明するところによると、彼らの交友関係が来日後の初期段階では他の留学生に限定される理由は、日本政府奨学生は初めから日本語を話せることが求められておらず、そのため英語を話せるほかの留学生か、あるいは同じ母語を話せる留学生としかコミュニケーションができないということになる。

さらにインタビューの回答を分析すると、日本語の流暢さと社会的交流の間には相補的な関係があるとみなされ、日本語能力に自信があればより多く日本人と交流を深めるようになり、これが結果的に日本語能力を向上させることになることがわかった。これは Gullahorn & Gullahorn (1966)、Chen (1993)、Barratt & Huba (1994)、Zimmerman (1995) の研究の結果と一致している。

日本人学生や職員との大学内での関係は、日本語による通常の授業を受けている学生に特に望まれていることもわかった。これは、機能や活動が異なれば留学生によって使われる友情のネットワークも異なることを示すために頻繁に引用される Bochner et al. (1977) の留学生の友情のネットワークモデルによって説明がつく。

インタビューを行った本調査の留学生は、日本人学生との関係は学業における成功にとって重要であると見なす一方で、留学生に対する情緒的な支援や余暇活動を求めている。しかしながら、日本における留学生の数は比較的少ないため、Bochner et al. が言う「単一文化の」友情ネットワークを形成できるようにみえる国は、留学生の人口の半分以上を占める中国人学生と韓国人学生だけである。その他の学生は「多文化的な」友情ネットワークを発展させる傾向にある。一方、岩男・萩原 (1987) と萩原・岩男 (1987) の調査結果である、日本人との関係は時の経過とともに悪い結末になる傾向があるということは、本調査では確認できなかった。

### 2.3. 命題の評価 文化的距離

命題 3：留学生が自国の大学文化と日本の大学文化との間に認識する距離が大きいほど、異文化適応は低い。

この命題は、外国の大学で勉強する際に学生に求められることが、自国の大学での環境と比較して違うものかどうか調べることを目的として設定した。多くの留学生の第一の目的は勉強であるため、日本での経験の全体的な満足感、学習・研究の環境や成果についての満足感から大き

く影響を受けると考えられる (Church, 1982)。

本調査のインタビューで留学生が言及した最重要テーマは、Cortazzi & Jin (1997) や Ward (2001) の研究結果と一致した。つまり、学生と教師の関係における文化的相違とそれぞれが果たすべき役割の違いによってしばしば誤解が生じ、その結果、研究がうまくいかなくなる。場合によっては、留学生が指導教員とのコミュニケーションを必要最小限以上にしないようになることがある。

教師と学生との関係の相違点の 1 つは、どの程度形式を重んじ改まった関係を持つか、ということにある。Becker (1990) が述べたように、日本におけるコミュニケーションは一方的であり、師から弟子への流れが中心である。インタビューした多くの留学生は、日本では教師を権威者としてみなし単に教授の指示に従うことが期待されていると感じていた。特に博士課程の学生は、学生と教師の上下関係が効果的なコミュニケーションを阻害するものと考えていた。イギリスやノルウェーなど、教授と形式ばらない関係をもつことが規範である国から来た学生にとっては、日本に深く根ざした主従関係は適応困難なものであった。

Becker (1990) や本調査の参加者によって確認された、日本に来た留学生にとってもう 1 つ困難なことは日本語のポライトネス (敬語) の問題である。教授と話するとき異なるレベルの話し言葉を使わなければならないということは、日本語におけるポライトネスの程度を完全には理解していないし間違った敬語を用いて教授の気を害したくないと思う留学生にとって、目上の人とコミュニケーションをとることがストレスとなることがある。

本調査は、Wierstra, Kanselaar, van der Linden, & Lodewijks (1999) がヨーロッパの学生について研究して得られた、「対照的な学習環境を有する国の学生でも、望ましいと考える学習環境についての意見は一致する」(p. 95) という結果を支持することになった。インタビューを行った学生が理想的な学習環境と考えるのは、教師と学生の間の距離が近い、授業へ学生がより積極的に参加できる、暗記や繰り返しを通した学習を重視しすぎない、というような特徴がある。

しかしながら、彼らが理想的な環境と考えるものには関係なく、イラン、フィリピン、台湾、韓国、スロバキアなどの国出身の学生は、日本を豊富な研究予算を利用できる先進国とみなしていた。したがって、奨学生の国の技術的、経済的発展のレベルが日本における研究環境についての満足感を決める重要な役割を果たしており、自国の大学の状況では研究能力を十分に生かせないと考えている学生は、日本の大学に対してより肯定的な見方をしていると推測できる。

日本に来た留学生について特に問題となる文化差と言語の関係を考えると、文化的距離が大きければ大きいほど、第 2 言語を学習することが難しくなるという Schumann (1976) の仮説が当てはまる。Tanaka et al. (1994) が述べたように、「漢字文化圏」出身の留学生は文化的にも言語的にも日本に近く、従って日本語を学ぶ際に有利な立場にいたことがインタビューから明らかになった。また Newfields (1998) も、もし目標言語とその学習者がよく知っている言語が似ているならば、言語を習得する上で経験する困難は少なくなると予測している。

文化的に日本に近ければ、日本の教師や学生をよりよく理解しよりよい関係を保持することが可能になり、文化適応も比較的容易になることがわかった。これは、本調査の韓国人学生や台湾人学生からの報告だけではなく、他の国からの留学生からもそのような見方が得られ、Furnham & Bochner (1982) 、Pedersen (1991) 、Wan, Chapman, & Biggs (1992) の研究結果を支持する形となった。

従って、1987年に岩男と萩原が報告したアジアからの留学生は日本人の彼らに対する態度に比較的満足感が低く、一方、北米・ヨーロッパ出身の学生は日本の教育の質に対して比較的満足感が低いという結果については、本調査では部分的な支持しか得られなかった。しかしながら、本調査では、中国（台湾）と韓国あるいはその他の身体的に日本人と似ている留学生だけは岩男と萩原の結果の「アジア人」のカテゴリーに当てはめることができる。これにより、個人の特徴を考慮に入れずに広い地理的な地域によって学生をまとめる研究に問題点があることがわかった。

まとめとして、あるグループの学生が大学への適応に比較的的成功するという仮説は、本調査の結果からでは支持されたとはいえない。中国人・韓国人留学生は一般的に日本への文化的、言語的近接性からより容易に大学に適応することができるとみなされているが、日本人によって「お客さん」としてみなされている他の学生には特別な待遇が与えられていることもわかった。

### 3 . 結論

本調査は、従来数量的研究を中心に得られたデータに基づいていた異文化適応の理論の妥当性について質的研究データを提供することができた。また、実践的な意義としては、日本における留学生の適応問題、特に国費留学生の就学上の適応を改善するのに役立つ知見を提供するものである。具体的には、本調査の成果として下記の3点が挙げられる。

- (1) インタビューを通して得られたデータによると、日本語能力については、多くの国費留学生は来日時に日本語の知識がまったくないか、あっても基礎的なものである。新しい言語を集中的に学ぶことと、新しい文化的環境への適応を同時に行うことで、しばしば日本での最初の数ヶ月間に、精神的重圧に悩まされることになる。研究上日本語の習得を必要としない留学生もいるが、本調査のすべての参加者は日本語の知識は日本人との社会的ネットワークを作り、指導教員と良好な関係を保ち、日本社会の一員であると感じるために必要であると語っていた。
- (2) 日本人学生との、また、留学生同士の社会的ネットワークはともに重要であるとみなされているが、その目的は異なる。特に留学生が研究室の一員である場合、大学での日本人との交友関係は勉学上の成功や所属意識にとって必要不可欠であると考えられている。一方で、他の留学生との交友関係は日本語のスキルがないことの結果として形成されたり、あるいは他の留学生しか自分の感情を理解してくれる人がいないと留学生が感じた時の支えになっている。
- (3) 文化的距離については、2つの主要な学生グループ（中国・韓国人留学生という多数派とその他）の間の違いが本調査の参加者から明らかになった。しかしながら、この結果はどれか特定のグループが日本での大学生活によりよく適応するという傾向は示していない。留学生の日本の大学への適応により大きな影響を与えるのは、指導教員との関係とともに、日本人教授と自国の教授の指導におけるコミュニケーション方法や研究方法の違いである。

### 3.1. 本調査の課題

本調査の結果を批判的に評価することは重要であり、その成果を考える時に考慮されるべき課題が残されている。事例研究の方法論を用いたことによって、結果の一般化に伴う限界がある。本調査の結果は異文化コミュニケーションの分野内で構築された先行研究の理論に対してのみ一般化することができるもので、日本の留学生全体に一般化できるものではない。したがって、サンプル数を増やし、質的研究と量的研究の手法の両方を組み合わせた研究が、この結果の一般化可能性を検証するために必要である。

留学生をインタビューの参加者とし、留学生だけに調査対象者を限定することによって、本調査は留学生の視点に限った彼らの経験をまとめた。本調査は理論的な分析の際に結論を導き出した観点は主として留学生のものであり、この点も限界点の1つとみなすことができる。大学職員、教員や日本人学生を考慮に入れたより大きな観点から研究することによって、日本に滞在する留学生の経験についての全体的な理解が可能になることはわかっている一方で、すべての現象に事例研究の手法を選択するならば非常に困難な作業となる。今後の研究には異なる方法論の組み合わせが求められる。

### 3.2. 今後の展望

今後の研究の方向性に対していくつかの提案をしておく。1点目は、本調査の成果が研究者や実務関係者に閲覧され、さらなる検討と理解が促されることを希望する。2点目は、本調査の範囲を拡大するために、より一般的な観点から異なる場面や状況を研究することである。3点目の可能性は、もし本調査で用いた研究形式やアプローチが有用であると他の研究者や実務関係者が考えれば、他の重要なトピックに関する新たな事例研究を加えていくことができる。

## 註

本稿は、著者の1人A. C. メリノが九州大学大学院比較社会文化学府において井上奈良彦、ヴォルフガング・ミヒェル、太田好信の指導の下に調査を行い作成した修士論文(Merino, 2005)に基づいている。

## 引用文献

岩男寿美子、萩原滋(1977a)「在日留学生の対日イメージ-1- 第一次調査資料と若干の考察」『新聞研究所年報』8号、9-34。

岩男寿美子、萩原滋(1977b)「在日留学生の対日イメージ-2- S.D.プロフィールの検討」『新聞研究所年報』9号、27-72。

岩男寿美子、萩原滋(1978)「在日留学生の対日イメージ-3- 滞日期間に伴う変化」『新聞研究所年報』10号、15-29。

岩男寿美子、萩原滋(1979)「在日留学生の対日イメージ-5- パネルスタディ」『慶応義塾大学新聞研究所年報』13号、21-50。

岩男寿美子、萩原滋(1987)「在日留学生の対日イメージ-8- 出身地域による違い」『慶応義塾大学新聞研究所年報』29号、33-53。

- 上原麻子 (1988) 「留学生の異文化適応」 広島大学教育学部日本語教育学科 (編) 『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』 (pp. 111-124) 広島大学教育学部日本語教育学科。
- 坪井健 (1991) 「アジアの学生・日本の学生 留学生調査と日本・台湾・韓国の比較調査を通して」 『駒沢社会学研究』 23号、115-144。
- 日本学生支援機構 (2006) 『留学生受け入れ概況 (平成 18 年版)』 閲覧日 2007 年 3 月 12 日  
[http://www.jasso.go.jp/statistics/intl\\_student/documents/data06.pdf](http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data06.pdf)
- 南風原朝和、市川伸一、下山晴彦 (編) (2001) 『心理学研究法入門 調査・実験から実践まで』 東京大学出版会
- 萩原滋、岩男寿美子 (1987) 「在日留学生の対日イメージ-9-滞日期間,日本語能力による違い」 『慶応義塾大学新聞研究所年報』 29号、55-75。
- 萩原滋、岩男寿美子 (1988) 「在日留学生の対日イメージ-11- 日本人の好む外国人」 『慶応義塾大学新聞研究所年報』 31号、35-52。
- 横田雅弘、田中共子 (1992) 「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク 居住形態による比較」 『学生相談研究』 13号1巻、1-8。
- 九州大学留学生教育研究環境調査委員会 (2003) 『外国人研究留学生の教育・研究環境改善のための基礎的調査報告書』 九州大学。
- Association of International Education, Japan. (2001). *Life and study in Japan: For Japanese Government (Monbukagakusho) scholarship students*. Tokyo: Author.
- Barratt, F. M., & Huba, M. E. (1994). Factors related to international undergraduate adjustment in an American community. *College Student Journal*, 28, 422-436.
- Becker, C. B. (1990). Higher education in Japan: Facts and implications. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 425-447.
- Blood, R. O., & Nicholson, S. O. (1962). The experiences of foreign students in dating American women. *Marriage and Family Living*, 24, 241-248.
- Bochner, S., McLeod, B. M., & Lin, A. (1977). Friendship patterns of overseas students: A functional model. *International Journal of Psychology*, 12, 277-294.
- Brislin, R. (1981). *Cross-cultural encounters*. New York: Pergamon.
- Chen, G. M. (1993). Self-disclosure and Asian students' abilities to cope with social difficulties in the United States. *Journal of Psychology*, 127, 603-610.
- Church, A. (1982). Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91, 540-572.
- Cortazzi, M., & Jin, L. (1997). Communication for learning across cultures. In D. McNamara & R. Harris (Eds.), *Overseas Students in Higher Education* (pp. 76-90). London: Routledge.
- Cox, J. (1988). The overseas student: Expatriate, sojourner or settler? *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 78, 179-184.
- Crystal, D. (1987). *Linguistic encounters with language handicap*. London: Basil Blackwell.
- Deutsch, S. E. (1970). *International education and exchange*. Cleveland, OH: Case Western Reserve University Press.
- Deutsch, S. E., & Won, G. Y. M. (1963). Some factors in the adjustment of foreign nationals in

- the United States. *Journal of Social Issues*, 19(3), 115-122
- Furnham, A., & Bochner, S. (1982). Social difficulty in a foreign culture: An empirical analysis of culture shock. In S. Bochner (Ed.), *Cultures in contact: Studies in cross-cultural interaction* (pp. 161-198). Oxford, England: Pergamon.
- Gullahorn, J. E., & Gullahorn, J. T. (1966). American students abroad: Professional versus personal development. *The Annals*, 368, 43-59.
- Heikinheimo, P., & Shute, J. (1986). The adaptation of foreign students: Student views and institutional implications. *Journal of College Student Personnel*, 27, 399-406.
- Klineberg, O., & Hull, W. F. (1979). *At a foreign university: An international study of adaptation and coping*. New York: Praeger.
- Marion, P. (1986). Research on foreign students at colleges and universities in the United States. *New Directions for Student Services*, 36, 65-82.
- Merino, A. C., (2005) Intercultural academic adjustment of Japanese Government scholarship students: A multiple case study at Kyushu University. Unpublished MA Thesis, Kyushu University Graduate School of Social and Cultural Studies.
- Morris, R. T. (1960). *The two-way mirror: National status in foreign students' adjustment*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Murphy-Shigematsu, S. (1997). Confronting basic barriers to counseling by international student advisors. *Journal of International Student Advisors and Educators*, 1, 1-12.
- Murphy-Shigematsu, S. (2002a). Psychological struggles of Korean international students in Japan. *International Education Journal*, 3(5), 75-84. Retrieved March 13, 2007, from <http://www.flinders.edu.au/education/iej>
- Murphy-Shigematsu, S. (2002b). Psychological barriers for international students in Japan. *Journal International Journal for the Advancement of Counselling*, 24, 19-30.
- Newfields, T. (1998). Handicap awareness in ESOL classrooms: A pilot project. *Tokai University Foreign Language Education Center Journal*, 18, 77-82.
- Nishida, H. (1985). Japanese intercultural communication competence and cross-cultural adjustment. *International Journal of Intercultural Relations*, 13, 333-347.
- Pedersen, P. B. (1991). Counseling international students. *The Counseling Psychologist*, 19, 10-58.
- Schumann, J. H. (1976). Social distance as a factor in second language acquisition. *Language Learning*, 26, 135-143.
- Sewell, W. H., & Davidsen, O. M. (1961). *Scandinavian students on an American campus*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Sudweeks, S., Gudykunst, W., Ting-Toomey, S., & Nishida, T. (1990). Developmental themes in Japanese North American international relationships. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 207-233.
- Takai, J. (1989). The adjustment of international students at a third culture-like academic community in Japan: A longitudinal study. *Human Communication Studies*, 17,

113-120.

- Tanaka, T., Takai, J., Kohyama, T., & Fujihara, T. (1994). Adjustment patterns of international students in Japan. *International Journal of Intercultural Relations, 18*, 55-75.
- Tanaka, T., Takai, J., Kohyama, T., Fujihara, T., & Minami, H. (1997). Effects of social networks on cross-cultural adjustment. *Japanese Psychological Research, 39*, 12-24.
- Wan, T., Chapman, D., & Biggs, D. (1992). Academic stress of international students attending U.S. universities. *Research in Higher Education, 33*, 607-623.
- Ward, C. (2001). The impact of international students on domestic students and host institutions. Retrieved January 2, 2004, from New Zealand Ministry of Education Website: <http://www.minedu.govt.nz/index.cfm?layout=document&documentid=5643&index id=1108&indexparentid=2107>
- Wierstra, R. F. A., Kanselaar, G., van der Linden, J., & Lodewijks, H. (1999). Learning environment perceptions of European university students. *Learning Environment Research, 2*, 79-98.
- Yin, R. K. (1994). *Case study research: Design and methods* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Zimmerman, S. (1995). Perceptions of intercultural communication competence and international student adaptation to an American campus. *Communication Education, 44*, 321-335.